

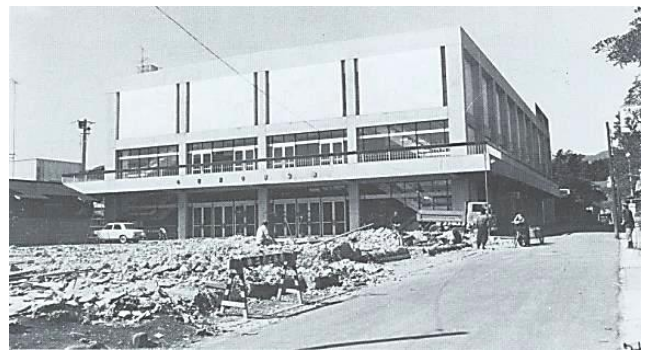
## 市民会館・大ホール壁画に込められた「想い」

昭和37年（1962）7月28日に開館した「小田原市民会館大ホール」には、市民にもあまり知られていない建築デザイン的魅力がある。なかでも大ホールのホワイエにある壁画は謎めいている。この壁画に込められた当時の「想い」に迫る。

### 1. 市民会館大ホールの建築的特徴

大ホールは、小田原城の景観を重視したため低層建築となり、舞台は地下となった。舞台装置の搬入は搬入口からリフトで地下へ下すこととなり、音響機材や大道具が増えるに従い、搬入の負担が大きくなった。楽屋は段差が多かった。上手袖は非常に狭く、搬入方法とともに舞台演出上の大きな制約となった。開館当初から著名な歌手の公演も多数開催されたが、1980年代以降、トレーラーで舞台セッケー式を持ち込む全国ツアー方式が主流になると、県央等他都市に大型のホールが整備されていくことと相まって、小田原での公演は減少していった。大ホール開館の3年後、昭和40年（1965年）5月8日に大ホールに隣接して小田原市民会館の本館が完成した。

小田原市民会館大ホールの設計者は「創和建築設計事務所」、建設業者は「(株)熊谷組」であった。現在では本館の影に隠れて、大ホールの全体デザインを確認することはできないが、大ホールは東側、即ち国道1号線側が正面となるようにデザインされている（写真1）。大ホールのデザインは、横浜市桜木町の「神奈川県立音楽堂」に極めて似ている。音楽堂は「モダニズム建築の旗手」と呼ばれた建築家・前川國男の設計である（写真2）。前川國男はフランスの建築家ル・コルビュジエに学び、その影響を強く受けた建築デザインで日本に数多くの名建築を残した。ル・コルビュジエの「近代建築の5原則」である「自由な平面、自由な立体、屋上庭園、横長の窓、ピロティ」を実現している。この2つの建築は、直線的な構成、横長の庇とピロティの形成、正面の全面ガラスなど、5原則的デザインが共通している。大ホールは、ル・コルビュジエから前川國男へと流れる建築デザイン・コンセプトから大きな影響を受けた、と考えて間違いないだろう。



（写真1）開館近い大ホールの外観  
（提供：小田原デジタルアーカイブ）



（写真2）神奈川県立音楽堂の外観

## 2. 大ホールのホワイエ壁画

大ホールのホワイエ正面には、客席扉が4つ並び、壁は真紅に塗られている。開館当初の写真からは、より色鮮やかな壁面の様子が分かる（写真3）。2階ホワイエも、群青色の壁画が鮮やかに描かれている（写真4）。これらの壁画が鮮やかに見えるのは、ホール正面の全面ガラス窓から射し込む眩い陽光が壁画を明るく輝かせていたと想像できる。しかし、本館完成により2階が渡り廊下でつながれ、また後の耐震補強工事で1階右端ガラス窓がコンクリート壁へ改修されたため、外光が直接入らなくなって、壁面は輝きを失ってしまったのである。



（写真3）開館当初の1階の赤い壁画



（写真4）開館当初の2階の青い壁画

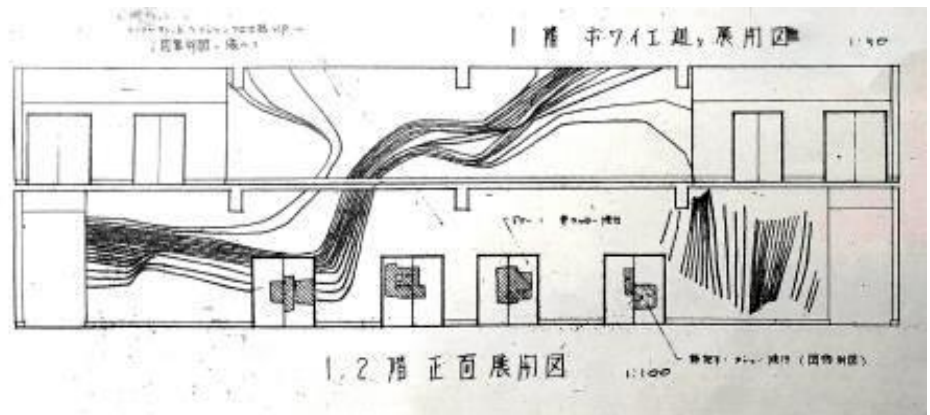
この壁は単に赤く塗られているのではなく壁画となっているのだ、と気付く人はほとんどいないだろう。壁の右下に

「YASUSHIRO-NISHIMURA」のサインがある。

西村保史郎は大正4年（1915）東京生まれ、太平洋美術学校に学び、「主体美術協会」の創立に携わった。町田市玉川学園にアトリエを設け、油絵作品の他、絵本や図鑑の挿絵を数多く描いた。平成27年（2015）に99歳で亡くなった。大ホールの大壁画を描いたことは年譜に記載されているが、その経緯については記録が発見されていない。

## 3. 壁画制作の謎

大ホール設計者の創和建築設計事務所は既に廃業して設計資料は残っていない。大ホール建設の設計思想や構想については謎であった。ところが、閉館を惜しみ結成された「市民会館アーカイブ隊」の調査によって、謎であった壁画制作の過程が一部分かってきた。



（写真5）1階壁画の企画構想検討時のデザイン図面



小田原市に昭和36年1月15日の図面が残されていたのだ(写真5)。この図面によって、壁画は建築構想当初から計画されていたと分かったのである。図面上のデザインは、実際の壁画とは異なり(図面には「図案別図ニ依ル」とあるが別図が不明)、1・2階を一体化したデザインとなっていた。明らかに正面の全面ガラス窓を通して壁画が見えるように意図されたと容易に想像される。本館が建たなければ、国道1号線側からは大ホールの正面が見え、1階・2階の全面ガラス窓を通して1階壁の真紅と2階壁の群青の鮮やかな色彩の対比を眺めることができたことだろう。壁画がガラスを通して見える当初のパースを想像して描いてみた(写真6)。



(写真6) 開館当初の大ホールパース想像画



(写真7) 県立音楽堂の入口の赤い壁

では、なぜこのような壁画を大ホールの入口正面に描こうとしたのだろうか。ヒントの一つは、県立音楽堂の赤・黄・緑に塗られた壁面である。いかにもル・コルビュジエ譲りの配色である(写真7)。音楽堂に入った瞬間に、来場者をワクワクさせる。もう一つは、有楽町駅前にあった日本劇場(日劇)である。1933年(昭和8)に開館し「陸の龍宮」と呼ばれたほど豪華な内外装を誇っていた。日劇1階ホワイエ正面に、ギリシャ神話をモチーフにしたモザイクタイル壁画があった(写真8)。画家・川島理一郎の原画で、タイル制作は工芸家・板谷波山の五男・板谷梅樹による。開館当初の小田原市長は鈴木十郎氏であった。鈴木市長は歌舞伎座支配人を務めた経歴がある。鈴木市長は大ホールに劇場としての風格を表したかったのではないだろうか。そこには、施主としての鈴木市長の強い思いがあったと想像できる。大ホール開館のわずか3年後、昭和40年(1965年)5月8日に大ホール正面入口東側に隣接して市民会館・本館が完成した。本館と大ホールが渡り廊下で結ばれたため、大ホール正面が見えなくなり、大ホール壁画はその「思い」を意識されなくなってしまった。本館(小ホール、結婚式場、展示室、食堂等)が果たしてきた役割は大きい、失われたものも大きかったといえよう。市民会館の大ホールと本館の全体構想が、どう計画され、どう実現し、またはどう変遷したのか、それらは今後の研究課題といえよう。(深野彰 記)



(写真8) 日劇ホワイエのモザイクタイル壁画

## 西村保史郎

### Nisimura yasushiro

#### 【略歴】

- 大正4年(1915) 東京に生まれる  
昭和11年(1936) 太平洋美術学校卒業  
昭和23年(1948) 「西村保史郎個展」会場：資生堂画廊  
昭和24年(1949) 自由美術家協会 会員  
昭和27年(1952) 「自由美術展6人展」会場：資生堂画廊  
昭和32年(1957) 「西村保史郎個展」会場：サエグサギャラリー  
昭和35年(1960) 「西村保史郎個展」会場：サエグサギャラリー  
昭和36年(1961) 小田原市市民会館壁画制作  
昭和38年(1963) 「自由美術キンパチ展」会場：椿近代画廊  
昭和39年(1964) 自由美術協会を退会し、主体美術協会創立に携わる  
昭和45年(1970) 「西村保史郎個展」会場：フォルム画廊  
昭和55年(1980)頃 町田市の玉川学園に住居とアトリエを建てる  
昭和61年(1986) 文化庁現代美術選抜展  
昭和63年(1988) 「西村保史郎個展」会場：資生堂画廊  
平成27年(2015) 10月8日逝去(享年99歳)

※上記のほか、児童向けの世界文学全集などのカバーや挿絵を多数手がけている。

小田原出身の脚本家 廣澤榮(黒澤明監督の「七人の侍」助監督も務める)著「白鳥の湖」(偕成社・少女小説シリーズ)の挿絵も西村氏によるものである。

## 小田原市民会館の壁画は 故・西村保史郎さん (1915-2015)の作品だった。

6月24日、小田原市役所文化部から、市民会館の壁画にYASUSHIROU NISHIMURAのサインがあり、主体美術の故・西村さんでしょうかという問い合わせのメールが入りました。1962年開館以来、長らく作品として意識されていなかったようですが、市と市民団体が小田原市の所蔵する美術作品確認作業を進めていく中で、会館大ホールの1階、2階の壁画が西村保史郎作であるとわかったようです。会館の老朽化にともない取り壊しも決まっているとのこと。ご家族もすでに皆亡くなり西村さんと小田原市との接点は何もわかりません。

7月12日、壁画を見に伺いました。1階ロビー正面はほぼ22m、深い赤。2階は14m青。重厚なマチエールと色合い、まさに西村さんの作品でした。壁のクロスに直接、下から天井まで全面塗り込み大変な作業だったと察します。

亡くなられて4年後、57年ぶりに思わぬ地で西村さんの作品に直面し、感無量でした。お元気だった頃を思い出し、何やら嬉しくもありました。もし、どなたか、西村さんと小田原との繋がりをご存じの方がいらしたら、ご一報下さい。

(事務局)



#### 西村保史郎氏プロフィール

1915年東京生まれ。  
1936年太平洋美術学校卒業。  
1949年自由美術家協会会員。  
1964年主体美術協会創立に参加。  
2015年10月逝去(100歳になる1週間前でした)  
資生堂ギャラリー、フォルム画廊、サエグサで個展。  
グループ展多数。  
児童書の挿絵も多数手がけ、PCで検索可。



▲1階大ホール正面の壁画。出入口が4カ所あります。赤を基調にダイナミックな構成です。床のタイルの色も壁画と調和していました。



◀2階のロビー壁画。絵具をかなり盛り上げた部分もあり青い抽象画は主体出品作品にも通じる表現でした。

